
存在ノ意味

pey

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

存在ノ意味

【Nコード】

N7153T

【作者名】

pey

【あらすじ】

神々の都合により異世界に飛ばされた少年、琥珀。彼は自らの存在の意味を探していた。しかし、異世界ある少女達と出会い、琥珀の存在は意味を変えていく。それでもなお旅を続ける彼らは知らず知らずのうちに神々の戦争へと巻き込まれる。諦めと妥協だけで生きてきた平和的敗北主義の作者が自らの主義を曲げてまでして本気で描く、長編ファンタジー。存在する意味を探す長い旅。その先で琥珀達を待つ運命とはいかに！！

第一話 始まりノ意味

世界と世界の狭間。^{はざま}

ただ真つ白で、存在自体が幻のようにも見える朧気な場所。^{おぼろげ}

そんな空間に、ポツリと浮かぶ人影が二つ。

それは純白のドレスに付いた小さなシミのように、漆黒の夜空に一つ浮かぶ星のように、強い存在感を放っていた。

一人は、鋭い目付きに整った顔立ちで、見たものを震え上がらせるような雰囲気^{まこと}を纏った青年だ。

その顔は自信に満ち溢れ、口元は愉しそうに歪んでいた。

もう一人は、長く白いの髭^{ひげ}をもち、威厳のある風貌の老人だ。多くの物を見てきた瞳は揺るぎなく、強い信念に染まっていた。

対極の位置に浮かぶ二人の間には、張り詰めたかのような沈黙が漂っていた。

「久しいのう、若造」

沈黙を破ったのは、老人だった。

鋭い眼差しは一直線に青年に注がれ、その声には重苦しいほどの迫力があつた。

しかし、青年はその迫力をものともせず言い返した。

「老い耄^{おほ}れが喚くな。いきなり呼び出しておいてなんのようだ？」
鋭い目付きは不快に染まり、身体全体で苛立ちを顕^{あらわ}にしていた。
その声もどこか刺々しく、聞くものを意図せず不快にさせる声だった。

「まあそう身構えるな。ただ頼みがあるだけじゃ」
老人は青年の悪態を軽く流し、淡々と言葉をはっした。

「頼み？」

青年が眉を顰^{ひそ}める。

青年は、目の前の男が他者に頼ったことは今まで一度も覚えがなかった。

「疑うのは当然じゃ。じゃが少し厄介なことになってのう。お主に頼まれて欲しいんじゃ」

老人が軽く溜め息を吐く。

どうやら本当に困っているようだ。

青年は少し考える素振りを見せたあと言った。

「珍しいな。まあいい、聞こうじゃないか。返事はそれからだ」

考えた対処は監察。

状況を理解するには一番安全な方法だ。

「実はのう、そろそろ”民の儀式”を開きたいんじゃが少し遅れてしまつてのう」

老人は、まるで自分に呆れるかのように語った。

その顔には自嘲の色が浮かんでいる。

「つまり生命体の数が余分に出た訳だ？」

青年もその言葉で大半を理解したらしく本題に進める。

その声色にはまるで失敗した老人を嘲笑うかのようなものも含まれていた。

「そうじゃ。そこでお主には一つ、生命体を預かってもらいたいんじゃないが……どうじゃるか？」

青年が黙り込む。

青年にとって老人の頼みを受けることは容易い。

しかし、それでは青年は認めない。

なぜなら、

面白くないからだ。

青年の口が闇夜に潜む悪魔のように吊り上る。

その愉しそうな顔に狂気はなく、子供のように純粹で、しかし、囚人のように異質な喜びが映っていた。

「いいぜ。ただし条件がある。それでもいいなら貰ってやる」

老人はすぐに頷いた。

既に、青年の性格からこうなることは予想していたのだろう。

「条件は二つ。まず、預かる生命体はこっちが決めること。もう一つは預かるじゃなく貰うことだ。いいか？」

青年は身体の前に指を二本立て説明した。

老人は驚愕していた。

青年の性格からしてもつと無理難題を突きつけられる覚悟をしていたが、青年が提示した条件は礼儀といっても差し支えないほど至極当然のことだった。

正直、拍子抜けだ。

「分かった。好きにせい」

だが、好条件であることには変わらない。

老人は、二つ返事で了承した。

「交渉成立だな。んじゃさっそく人選でもしに行きますか」
そう言い残し青年は掻き消えた。
愉しげな笑い声を残して。

独り残った老人は、苦虫を嚙んだような表情をし、方向の分からない空を仰いだ。

「なにか……よからぬことがおこる気がするのう」
そう独り言を残し、老人も消えて行った。

ここは『黄昏^{たそがれ}の神域』

各々の世界を管理する、神々の密会場所。

第二話 少年ノ意味（前書き）

二話目更新！

どうぞ〜

サイトも公開中♪

<http://blog.livedoor.jp/pey08/>

第二話 少年ノ意味

少年にとって『自分』とは『無意味』だった。

己の存在する意味が無い。

悲劇の過去が虚無感を生み、欠けた感情が喪失感を駆り立てた。

少年は繰り返しの日々を過ごし、意味の無い人生を送っていた。

しかし、少年の瞳は輝きを失っていなかった。

自らが『無意味』に見える少年にとって、自分以外のものはより一層輝いて見えた。

少年はそれを見るのが好きだった。

少年の瞳は、まるでまだ好奇心に胸膨らませる子供のように、淡く輝いていた。

「ただいま」

日も沈み、辺りが暗くなつた街の一角。

そこにある、少し小さめの家に力のない声が響いた。

その家の玄関には、声の主である少年がどこか疲れた表情で重い扉を押し開けていた。

家の中から返事はない。

全く物音がしないことから無人であることが伺える。

夕暮れ時に電気も付けず続く廊下は薄暗く、どこか不気味だった。

それでも少年は気にせず歩を進める。

少年の名は清水^{しみず} 琥珀^{こはく}。

この家にたった独りで暮らす、高校二年生だ。

両親は半年前に死に、頼れる親戚も居なかった為仕方なく独り暮らしをしている。

高校は自転車で一時間弱の所にある進学校で、今そこから帰ったところだ。

「ふう。今日は一段と疲れたな」

琥珀はどこか達観した様子で呟き、不気味な廊下を抜けリビングの電気を付ける。

明かりがつくとさっきまでの不気味さがまるで嘘のように豹変する。

だからといってどうという訳でもないが。

琥珀は、まず一直線にある所へ向かった。

仏壇。

そう、琥珀の両親の物だ。

しかし、そこへ向かう琥珀の表情からはなんの感情も感じられない。

琥珀が仏壇の目の前に着く。

そして、お供え物であろう林檎を敵等に引つつかんですぐ踵を返す。

まるでやる気の「や」の字もない。

そんな態度にも理由はある。

琥珀は両親から愛情と呼ばれるものを貰ったことが無いのだ。俗に言う『虐待』と呼ばれるモノさえ受けていた。

だが別に恨んでいる訳ではない。

ただ、敬意を払う必要が無いだけだ。

琥珀は両親に産んでもらったことすら感謝していなかった。

「あ……」

それでもマナーとしてお供え物はする。

しかし、今日はそのお供え物の果物が底を尽きていた。

本来ならば帰り道にでも買ってこようと思っていたが、琥珀は完

壁に忘れていたのだ。

こんなところからも琥珀の敬意の欠片もない態度が表れていた。

「仕方が無い。買いに行くか」

横目で時計を確認する。

午後八時。

近くのスーパーでもまだ余裕で開いている時間だ。

一度溜め息を吐き、一瞬制服から着替えようかと思ったが、たかが買物だ。

別にいいだろうと思い直し、そのまま家を出た。

外に出ると、真冬の寒さが琥珀を襲った。
八時でもこの季節ではもう真っ暗だ。

「ううゝさぶ。早く行こう」

身体を縮こませ、白い息を吐きながら、琥珀は歩き出した。

いつもの見慣れた道も夜の闇に包まれると、また違った輝きがある。

そんな風景を少し楽しみながらも早足で進む。

「おっと、赤か」

信号で止まる。

車通りは少なく、たまにスピード違反の車が通るくらいだ。

他に車が無いとはいえ、物凄いスピードで走り抜ける車。

それを見ると大丈夫だと分かっているけど少し怖がってしまうのが人間である。

実際、周りにちらほら見える人々は歩道の外側を歩き、二三歩下がった所で信号を待っていた。

しかし、琥珀は違った。

他の人々よりも明らかに前で立っている。

目の前を高速の車が走って行く。

あと一歩でも進めば確実に轢かれる位置だ。

しかし、琥珀の顔には恐怖は映っていないかった。

物心付く前から続いていた暴力による教育。

それは、琥珀から『恐怖』と言う感情を消し去っていた。

別に不便な訳ではない。

『恐怖』が無くなっても笑うことはできる。

それどころか、よくなった面もある。

いきなり目の前に物が飛んできたら人はどうするか？

答えは『硬直する』だ。

こういうとき、人は咄嗟に行動できない。

そしてその硬直は恐怖から来るものだ。

人は物を避けることよりも自らの保身に動く。

その結果、恐怖を感じると無意識的に縮こまり、少しでも身を護ろうとするのだ。

しかし、琥珀の場合はその恐怖が無い。

つまり、琥珀は飛んできたものを避けることができる。

それにより、琥珀はなんども助けられていた。

「ふわあゝゝ」

琥珀が盛大に欠伸をする。

そんな緊張感の欠片もない琥珀の前を一つの影が通り抜けた。

その瞬間、琥珀の思考は加速した。

目の前を通ったのは小学生程度の女の子だった。

勿論、信号は赤。

視界の端に写る大型トラックが周囲に絶望を与える。

辺りにクラクションが響き渡る。

人々は女の子に気づき『硬直する』。

動けるのはもはや琥珀一人だった。

必死で駆け出す琥珀。

死に向かう少年。

しかし、その瞳は彼の中で一番、輝いてた。

女性の悲鳴が響き渡る。

多分、女の子の母親だろう。

その絶望しきった叫びが女の子への愛情から来るものだと思うと、琥珀は酷く優しい気持ちになった。

トラックが罪を犯す寸前。

琥珀はその隙間に己をねじ込み女の子を出来るだけ優しく突き飛ばした。

安堵するのも束の間。

次の瞬間には琥珀の身体は吹き飛んでいた。

第二話 少年ノ意味（後書き）

6 / 23 大幅編集

第三話 神ノ意味（前書き）

前回までのあらすじ

恐怖を感じないだけの単なる高校生、琥珀は、両親へのお供え物を買いに出かけた。

しかし、琥珀を待っていたのはスーパーに残る安物の果物達ではなく、命を失い掛けた少女だった。

そんな少女を庇い死んだ琥珀は、見たことも無い真っ白な空間にいた。

第三話 神ノ意味

何もない、ただ真っ白な空間に一人の少年が倒れていた。
黒い学生服に身を包み、規則正しい寝息を吐いている。

「ん……………」

少年が声を漏らす。

閉ざされた瞼がうつすらと開き、少年…………琥珀は目を覚ました。

「いつ……………」

上半身を起こした琥珀は頭に痛みを感じた。

片手で頭を抑える。

しかし、その程度でこの頭痛が治まる筈もなく琥珀は顔を^{しか}顰めた。
仕方なく琥珀は頭痛を諦め立ち上がる。

寝起き独特の気だるさを伸びで拭い去り、周囲を見渡す。

そして、呆然と呟いた。

「…………どこだよ……………」

「お？起きたか」

背後から不意に声を掛けられる。

驚いた琥珀は、飛び退こうとする体を何とか抑え、振り向く。

「よー」

そこには楽しそうに笑う一人の男が居た。

片手を挙げ、軽く声を掛けてくる。

信じられないほどの美形だ。

しかし、次の瞬間には男の口の両端がまるで三日月のように吊り上る。

空気の質が変わった。

身体が重く感じる。

皮膚を通してまるでビリビリする錯覚まで起きる。

全身の生存本能が悲鳴を上げる。

この男は危険だ、と。

しかし、それでも琥珀は恐れを抱かない。

まるで、他人事のように客観的に見ている。

そして冷静に考え、今出来る最良の行動を行う。

「ほう？面白い……」

男が感心の声を上げる。

琥珀が取った行動は『構える』こと。

逃げてても無駄、攻めても無駄、そう考えた上での『構え』だった。

足を肩幅よりやや大きく開き、右足を少し前に出す。

腰を落とし、拳を握り、男を真っ直ぐに睨みつける。

「合格だ」

男が短く、キツパリと言い放った。

同時に男の口も元の形に戻る。

それと共に緊張感が消え、重苦しかった空気は嘘のように軽くなる。

しかし、琥珀は構えを解かなかった。
明らかな警戒。

それを受けて尚、男は笑っていた。

「何者だ？お前」

琥珀が眉間に皺を寄せながら問う。

「神だよ。お前らの神ではないがな」

男は平然として至極当然のように答えた。

対して、琥珀はあからさまに嫌そうな表情をする。

琥珀にとって男の言っていることが嘘なのか本当なのかはわからない。

これまで一度も本物の神と会ったことはないし、神が存在しないと完全に言い切れる訳でもない。

だが、琥珀の顔にはこう書いてあった。

『こんな神がいてたまるか』と。

「今回はお前に頼みがあつてわざわざ閻魔の野郎からお前をかつぱらつてきた訳だ」

しかし、男改め神（自称）は琥珀の無言の非難を軽く流し、勝手に話を進める。

そんな態度も、もう諦めかけている琥珀は何も感じなかった。

「頼み？神がか？」

琥珀は構えを解きながら、皮肉を込めた疑問を口にする。
警戒を解いた訳ではなく構える意味が無くなっただけだ。

目の前の男が本気を出せば、構えていようがいまいが結果は同じなのだから。

「神だからといっても全能な訳じゃない。完璧に近いモノほど矛盾が多いものさ」

神がわざとらしい口調で答える。

そして、また楽しそうに笑い、こう続けた。

「お前は死んだ。それは分かるか？」

自然な流れから出たとは思えない台詞だった。

しかし、そのことは琥珀自身が一番よく分かっているので素直に頷く。

神は、そんな琥珀を見て笑みを深めた。

「ちなみにお前は俺が殺したと言っても過言じゃない。そういう運命にしたからな」

神は、まるで挑発するような口調で言い放った。

口の端をこれでもかというくらい吊り上げ、鋭い目で琥珀を観察する。

だが、琥珀の表情は変わることは無かった。

「そうか、なら礼を言わなきゃな」

琥珀の口から告げられたのは、神の予想に大いに反する言葉だった。

ここにきて琥珀は初めて神の表情が大きく変わるのを見た。

神の顔は、驚愕に染まっていた。

「俺の命なんかどうでもいい。そんな無価値なもの。それより俺は死ぬ寸前、女の子を救えたんだ。だから、ありがとう」

琥珀がここにきて初めて笑顔を見せる。

神は暫く呆然としていたが、突然大声で笑い始めた。

そこに、馬鹿にするような色は全くない。

自らが選んだ奴で間違いは無かったと確信したからこそその笑いだ

った。

「お前のそういうところが気に入ってた。さて、本題にもどそうじゃないか」

神はひとしきり笑ったあとそう切り出した。
断る理由がない琥珀も頷く。

「実は、お前んとこの神に頼まれてな。お前を俺の世界に連れて行かなきゃいかん」

神は簡潔に分かりやすく説明した。

「お前の世界に？またなんで？」

琥珀は思った疑問をそのまま口にする。

「世界には容量つてもんがあるんだ。それを越えると世界は壊れちゃうんだ。だから普通、そうなる前に『民の儀式』ってやつをやつてその容量を増やすんだがな？」

そこで神は一度区切る。

そして、軽く溜め息を吐いてから続けた。

「その民の儀式には、人一人分の余裕が必要なんだわ。だけどお前とこの神の野郎がその余裕をなくしてまってる。民の儀式が出来なくなつたんだ。まあ、普通はそうなくても運命操作で人間一人を消せばいいんだが、お前んとこの神は運命操作で誰かの寿命を縮めるのが何よりもきらいでな？仕方ないから俺が預かったわけだ。お前を」

神の話が終わる。

琥珀は何か考え込んだまま何も言わなかった。

暫くして琥珀は言った。

「つまり、俺はお前の世界に行けばいいんだな？」
神が頷く。

「よかったな。異世界だぞ。ちなみに魔法もある」
神はどこか誇らしげに言った。

しかし、琥珀は溜め息を吐いた。
魔法なんてものは琥珀にとって不安要素にしかない。
だが、琥珀が吐いた溜め息は不満から来るものでなく諦めから来るものだった。

「はあ……拒否権は？」

「あるわけがないだろう」
即答だった。

琥珀は再度溜め息を吐いた。

そんな琥珀の前でも神は不敵に笑っている。

「あきらめろ。一応俺の力を少しくれてやるから」
そういつて神は琥珀に手をかざす。

その手から曖昧に揺らぐ糸のようなものが琥珀に伸びる。

「なんだこれ？どうすればいいんだ？」

「掴め、それだけだ」
いわれた通り糸を掴む琥珀。

感触は無いが触ったところが少し熱くもっていた。

しかし、次の瞬間。
糸が生き物のように蠢き、手首に巻きつく。
そして、動脈に突き刺さった。
だが、痛みはない。

「なんだ？」

「魔力の糸だ。これからお前に力を送る。ちょっと話しかけるな」

「あ、ああ」

それっきり神は黙り込む。

琥珀も言われたとおり話しかけなかった。

「うしっ！終わったぞ」

神がそう言ったのは琥珀がこれからの予定を巡らせて四周目の時だった。

一旦、思考を切りやめ琥珀は神に対峙した。

ちなみに琥珀が考えた結果、これからの琥珀の予定は、四周連続『なるようになる』で落ち着いた。

そんな未来に一抹以上の不安を抱きながらもさして気にしていなかった。

なんといつても怖くないのだから。

「まあ、簡単な肉体強化と魔法に関するいろんなものの強化、その他諸々といった感じだ」

神が簡単に説明する。

しかし、その顔はだるそうで、欠伸まで披露していた。

「そうか……。世話になるな」

しかし、今更そんなことを気にする琥珀ではない。

だが、琥珀もだるそうに欠伸を噛み殺していた。

「礼なんかいらん。さっさと出てけ」

神が嘲笑うかのように言う。

「ならさつさで行かせる」

琥珀も即座に言い返す。

神と琥珀は睨み合う。

二人の間には、火花が散っていた。

このとき、二人は苦しくも同じことを考えていた。

『気に入らない野郎だ』と。

「はあ。まあいい。そろそろ送るぞ」

暫しの睨み合いの後、神はそう切り出した。

神にとって、こんなあからさまに睨んでくる相手は初めてであった。

それは、腹立たしくもあり、嬉しくもあった。

「んじゃ、いくぞ」

神がなにか呪文のようなものを唱え始める。

しかしそれもすぐに終わり、琥珀の足元に発光する魔法陣が現れる。

だが琥珀は全く動じず、目を閉じていた。

「あ、ちなみにどこにいくかは分からんからな。海とかでも恨むなよ？」

「なっ！？ちょ！まてっ！！」

さらっと、衝撃的なことを言う神に琥珀は慌てて制止の声をあげる。

だが、時既に遅し。

琥珀が薄れ行く視界の中で最後に目にしたのは、ニヤニヤ笑う神の顔だった。

第三話 神ノ意味（後書き）

次回予告

神の都合で異世界に飛ばされた琥珀。
しかし辿り着いた先は……

空中！？

全く飛行能力の無い琥珀の運命とは！！

第四話 刀ノ意味（前書き）

前回までのあらすじ

神の都合で異世界に飛ばさせた琥珀。

そんななか琥珀が最後に見たのは、神のニヤニヤした嫌な笑みだった。

行き先不明の神の悪戯による琥珀の運命とは！？

第四話 刀ノ意味

「うゝゝん？」

琥珀は地面に背を向け、体を大の字に広げ、困り果てていた。

下からは荒れ狂うような突風が髪を暴れさせ、服の端をこれでもかというほどに上へ押し上げている。

身体を荒々しい浮遊感が包み、蒼く透き通った空は心無しか近く感じる。

そう、ここは空中。

しかし、琥珀には空を飛ぶ為の魔法ちからもなければ、体を浮かせる為の道具ちからもない。

つまり落下中なのだ。

だが、見渡す限りの上空にはバンジージャンプのような飛び込み台はない。

勿論、体を引き留める為の縄も。

一直線に地面に向かう体は自由落下を始め、重力加速度Gを受け、着実に加速していた。

目が覚めたらこの状態だったのだ。

勿論、原因はわからない。

琥珀もそのことで悩んでいるのではない。

近い未来に確実に来るであろう着地^{ついで}、それに対処しようとしているのだ。

しかし、神から力を分けてもらったとはいえさっきまで普通の高校生だった琥珀になにが出来よう？

その肝心な神から貰った力ですら、うまく扱えないのである。

地面まであと少し。

琥珀は、別れ際の神のニヤニヤした顔を思い出し、拳を震わせた。

（あいつ。今度会ったら覚えとけよ）

琥珀は心の中で固く誓い、そのためにはたとえ生きる方法を考える。

まず、今の状況を再度頭の中で整理する。

落下中。

まあ、それはいい。

役に立ちそうなものは、もう随分と近くなった地面に生い茂る木々ぐらいだ。

それに、木で隠れてよくみなきゃ分からないが、琥珀の下には巨大な大穴がポツカリと空いていた。

何度考えても絶望的状态である。

結局、そこら辺の木に掴ってみよう、となった。

他に方法が無いのも確かなのでこれに賭けるしかない。

そう結論を出したときには、生い茂った青々しい葉が目の前にあ

った。

即座に体を回転させ下に向き直る。

顔の前で腕をクロスさせ、体を丸めることで葉っぱの攻撃をやり過す。

しかも、琥珀はその間も目を見開き、掴まっても大丈夫そうなものを探す。

長かったとも短かったともいえる葉っぱの攻撃を抜けたとき、琥珀は少し開けた場所にでた。

（見つけた！）

そこで琥珀は下に見える真つ暗な大穴の底まで届いているであろう、太いツタを見つけた。

あれなら、琥珀が掴まっても大丈夫だろう。

しかし、琥珀とそのツタの間には二メートル程度の空間があった。空中で身動きの取れない琥珀にはその空間は致命的だった。

しかし、琥珀は諦めない。

あの男をぶん殴るまでは。

（おらっ！！）

限界まで身体を捻り、それを戻す力でなんとかツタに近づく。

琥珀はそれを何度か繰り返し、結果としてツタを掴むことはできた。

しかし、それと同時に来る激痛。

もはや、車より速く落下する琥珀。

その動きに逆らっている右手は、その摩擦に悲鳴をあげたのだ。

だが、そこで怖気づく琥珀ではない。

なぜなら、怖気づくとは『恐怖』に『気づく』と書くのだから。

（おりゃ！）

痛む右手でツタを引き寄せ、空いていた左手でもツタを握る。

渾身の力を込めて握る。

しかし、速度は一向に緩む気配はなく、琥珀は深い闇に飲み込まれて行った。

穴の奥底、そこに琥珀は立っていた。

手からは真つ赤な血を滴らせ、苦痛に顔を歪めながらも生きていた。

琥珀の側には、琥珀の血で真つ赤になったツタがぶら下がり、ぶらぶらと揺れていた。

「ふう……。なんとか生き延びたな」

琥珀は、どこか達観した様子で呟き、辺りを見回す。

予想外にもそこは明るい空間だった。

壁の所々に生えるように突き刺さった水晶のようなものが蒼く輝いているせいだ。

その透き通った光は神秘的で、琥珀は少しの間手の痛みも忘れてしまった。

そんな琥珀は、自分の目の前に大きな建造物のようなものが鎮座していることに気がついた。

「なんだ……これ？」

それは、蒼い大理石のようなもので出来た祭壇のような建物だった。

天辺は見えるが遥か高く、そこになにがあるのかは上ってみないと分からない。

少しの間悩んだ末、琥珀は祭壇の頂上に続く階段の一段目に足を掛けた。

——カッン……カッン……。

固い大理石を踏みしめる音が響き渡る。

琥珀は、もう少しで頂上に着こうとする所まで登っていた。

「ふう……」

少し安堵の息が洩れる。

何も無い階段をただ黙々と登るのは流石に疲れた。

最後の段に足を掛ける。

祭壇の上は、下からは思いも寄らないほど広い空間だった。

大理石で出来た床がただただ広がっていた。

その殺風景な蒼い空間にひとつの銀があった。

それは？刀？

蒼い空間の中心に突き刺さった刀は測らずとも目立っていた。

琥珀は、その刀に踏みよりながらも観察する。

確かな反りがある刀身は穢れない白銀。

柄は、見た目ボロボロの包帯の様な物で巻かれ、余った包帯が柄頭から地面へと垂れていた。

『寄るなっ！』

あと五歩もすれば刀に手が届くという所で何処からか悲鳴のような声が響く。

なんだ？と琥珀は周囲を見回した。

——ドゴォン！

と共に鳴り響く衝撃音。

琥珀から刀を挟んで三十メートルほど前、つまり琥珀の正面に土煙が立ち込める。

そこから出てきたのは人影。

身体中を鎧で包み、顔すら見る事が出来ない。

その威圧感は果てしなく、そこに立っているだけで大気を震わせた。

しかし、琥珀は平然と立っていた。

神の殺気ですら折れない琥珀にとって、その足元にも及ばない威圧感など全然、意味を成さなかった。

だが、琥珀は違和感を感じていた。

その鎧からは、生きている物ならば皆が持つ、生气と言う物が感じられなかった。

まるで、威圧感だけがそこに存在している。そんな違和感。

『それ以上寄るでないぞ？死にたくはあるまい』

また、声が響く。

しかし、琥珀はこの声がああ鎧から出るとは到底思えなかった。なぜなら、声はまるで少女のような声色だったからだ。

そして、琥珀には何故か確信めいた考えがあった。

この声は刀から出ている。そんな確信。

琥珀は、一歩踏み出した。

そう、声を完全に無視したのだ。

死による脅迫は琥珀には全く意味を成さず、それどころか、琥珀の好奇心を燦^{くすぶ}る結果となったのだ。

『なっ！？貴様！本当に死ぬぞ！！』

声が必死に叫ぶ。

その声にはどこか悲しみのようなものが混じっていた。

鎧がギシギシと音を立てる。

しかし、琥珀はものともせずまた一步踏み出した。
刀までは後二歩程度だ。

『来るなといっておろう！聞かぬか！！』

声が悲鳴を挙げる。

いまにも泣き出しそうな声だった。

鎧の身体もギシギシと軋みながらも徐々に動きだす。

それでも琥珀はまた一步踏み出した。

もはや、刀まではあと一步というところまで来ていた。

『やめよ！妾にそれ以上近づくなっ！！我はもう殺しなどみつない！！！！』

声が泣き叫ぶ。

その声を聞き、琥珀の中の好奇心が消えた。

だが、琥珀の歩みは止まらない。

ただ純粹に助けたかった。

その声に、底知れぬ悲しみと、優しさを感じたから。

——ズン！

琥珀の足が地響きを立てる。

神の力の欠片が振るわれた瞬間だった。

鎧も一步を踏み出していた。

琥珀の手が刀に伸びる。

未だ乾ききっていない血が床に垂れる。

もはや、声はすすり泣くことしか出来ていなかった。

琥珀の手が刀を掴む。

次の瞬間——

——ガキンッ！！

けたたましい金属音が響く。

琥珀と鎧は土煙に包まれている。

土煙が晴れる。

そこには、真紅の刀で鎧の剣を受け止める琥珀の姿があった。

第四話 刀ノ意味（後書き）

次回予告

異世界にて祭壇の上で刀の悲鳴を聞いた琥珀。
それでも琥珀は死に向かった。

相対するは死の施行人。

琥珀に勝機はあるのか！？

第五話 戦いノ意味（前書き）

前回までのあらすじ

新たな世界に渡り、困難を乗り越えた先で琥珀を待っていたのは一振りの刀とその番人だった。

始めは興味本位であった琥珀だが、刀の叫びを聞き、鎧と闘う決意をする。

初めての戦闘で琥珀勝機はあるのか！？

第五話 戦いノ意味

——キン！

琥珀は素早く鎧の剣を弾いて、後ろへあとづさる。

しかし、琥珀は軽く後ろにステップしたつもりでも身体は予想外に跳ね上がった。

結果、大回りのバック宙になってしまう。

「はぁ！？」

暫し啞然とする。

今までの琥珀からは考えられない動きだった。

身体が在り得ないほど軽い。

今思えば、鎧の高速の動きが見えたこともおかしい。

ただの高校生である琥珀がそんな動体視力を持ち合わせている筈が無い。

力が漲って来るとはこういうことをいうのだらうと直感的に感じた。

ふと、右手にある真紅の刀に目を向ける。

この刀のせい？

そんな考えが琥珀の頭を過る。

だが、琥珀にはそれはないという考えの方が何故か強かった。

それよりも、琥珀にはさっきまで銀色に輝いていた刀が、何故か紅くなっていることの方が気になっていた。

まるで、琥珀の血を吸ったかのように赤くそまった刀身は、見る者を畏れで染め上げるほど禍々しい。

しかし、恐れを感じない琥珀には、どこか心地良い感覚だった。

恐怖に染められた感情は琥珀の体質によって無に還る。

無とは、人の中で最も辛く、最も自然体なモノ。

琥珀は、恐怖に染まれば染まるほど自然体に近づいていた。

『お主……何者じゃ？』

また声が響く。

しかし、さっきまでとは違い声の出所ははっきりしていた。

「やっぱり、お前……なのか？」

琥珀は、半信半疑で刀に聞いた。

そう、声は真紅の刀から聞こえていた。

琥珀は、予想通りでも信じられなかった。

『うむ』

返事は肯定。

微かに振動したのも琥珀の確信を深めた。

この世界に来てからの出来事。

その、摩訶不思議さに琥珀は軽い眩暈のような感覚を覚えた。

しかし、それも束の間。

琥珀は、少し慣れ始めていた。

琥珀にとっての現実リアルは、違う現実ファンタジーに変わろうとしていた。

「そうか……殺しは嫌か？」

琥珀は刀を構え直しながら問うた。

少し前の『もう殺しなどみとうない』という言葉に対しての問いだ。

優しい声だった。

少なくとも琥珀の意思を動かす程度には。

琥珀は刀に対して、既に自分以上の価値を見出していた。

刀を掴んだ手は血が滲んでおり、もはや刀身まで垂れていた。

『嫌じゃ！もう殺しなんぞごめんじゃ！』

刀が叫ぶ。

同時に真紅の刀身が一際おおきく震えた。

と、琥珀の心に広がる優しい気持ち。

琥珀の心は決まった。

「そうか……なら、一緒にアイツを倒そう」

琥珀が強い眼光で鎧を睨む。

先程の違和感は、いつしか確信へと変わっていた。

鎧の中は……無人。

刀を正眼に構え腰を落とした。

駆け出す準備は万全。

あとは、返事を待つのみ！

暫しの沈黙。

『うむ！』

刀が答えた。

その声色は力強く、琥珀の背中を押すには十分だった。

琥珀が駆け出す。

余波で地面が抉られた。

しかし、琥珀には影響しない。

琥珀は一瞬で鎧の目の前に移動していた。
刀は既に振り上げられ、力を溜めている。

そして、そのまま刀を振り下ろした。

——ギン——！！

金属音。

——ゴウツツ

遅れてくる突風。

その中心で、琥珀は鎧と衝突していた。

互いを隔てるは各々の刃のみ。

その交点からは火花が咲き乱れ、琥珀の前髪を焦がした。

しかし、それでも琥珀は進む。

恐怖が無いのだから切迫した状況ほど琥珀の有利なのだ。
相手に感情があるかは不明だが。

極限の状態で、琥珀はこの上なく？自然体？だった。

上半身を屈め、剣の下に潜り込む。

自然と刀が置き去りになるため、少し大振りに横に薙いだ。

しかし、鎧はそれをバックステップでかわした。

そして刀を振りぬいた状態の琥珀に突きを放った。

琥珀の意識が一瞬恐怖に染まる

そして跡形も無く消えた。

感情全てを覆っていた恐怖が消えたため他の感情が全く湧かない。
ただ、客観的な意識に切り替わった。

そして、今出来る最善の行動、最小限の動きでかわした。

しかし、鎧の左手に何かが集まっている。

琥珀は本能的に危険を感じ、跳んだ。

一拍おいて、鎧が左手を地面に叩きつける。

そして、琥珀がバック宙で避けたところに巨大な岩の柱が突き出た。

「おおっと」

その余波で琥珀がよろける。

予想外の事態に琥珀も咄嗟の反応が遅れたのだ。

その遅れが小さくない隙となる。

その隙について鎧が、琥珀に切迫する。

——ガキーン！！！！

下段から振り上げられた剣が琥珀を弾き飛ばす。

咄嗟に刀で身を守った琥珀だが、空中では成す術なく飛ばされた。

しかし、そこでも琥珀は冷静に対処し、回転にて着地する。

そこは、始めにいた位置。
ふりだしに戻ったのだ。

「なんだ？いまの」

琥珀が疑問を口にする。

勿論、戦いの途中で出た岩の柱のことだ。

『魔法じゃ。知らぬのか？』

刀が答えた。

琥珀も理解する。

神も言ってて現実で見たのだ。

無理でも理解する。

納得はしないが。

（だけど……）

琥珀は自分の手を見る。

（戦える）

いつの間にか琥珀の手は拳を作っていた。
その瞳は闘気と覚悟に燃えていた。

『……………お主』

「ん？どうした？」

『いやのう……やっぱりなんでもないのじゃ!』

刀は言葉を濁した。

戦いに集中するための配慮からだ。

「そうか……っ!？」

琥珀が相槌を打ってまもなく、鎧が動き出した。

鎧の足元に巨大な魔法陣が現れる。

目映く輝く魔法陣はどこか神秘的で、綺麗な蒼色をしていた。

『まずい……逃げよ!!』

刀は呆然と呟いた後、叫んだ。

琥珀もそれに従いすぐに跳ぶ。

思いつき後ろに跳んだため、一步で祭壇の頂上の一番端まで到達した。

その間にも鎧が乗った魔法陣は回転し、加速していた。

所々に稲妻が走り、魔法陣からはみ出たものは地面を抉った。

あたり風が中心——つまり鎧——に吹き込み、琥珀の不安に拍車を掛けた。

「なんなんだよっ……これは!？」

『魔術式じゃ』

刀が琥珀に答えた。

「魔術式?なんだそれ？」

『さっきあの鎧が出した岩があるじゃろ？あれは【魔法】といって、出は速いが威力はそこそこの言う代物じゃ』

刀が早口で説明しだす。

そんな隙にも、鎧の魔術式は着々と完成に向かっていった。

「ちがうのか？」

琥珀はどうか攻撃を阻止できないかと頭の片隅で考えつつ、聞き返した。

体制は、低く構えており、いつでも動き出せるようにしてあった。自然と刀を持つ手にも力が入り、柄に巻かれた包帯を赤く滲ませた。

『まあ、それに関しては後回しじゃ。今は【魔術式】についての方が先決じゃ』

——キイイ——

魔法陣が軋みだす。

不思議と琥珀は落ち着いていた。

琥珀にとって、落ち着きが無いとは、アドレナリンの効果で？せわしなくなる？ということを言う。

実際に、さっきまでは生死を賭けた戦いで疑いようも無い興奮状態になっていた。

しかし、いまはそれが無い。

なんとなく、琥珀は刀のお陰だと思っていた。

一人より二人。

当然の心理だ。

『【魔術式】とは、術式と言っただけあって発動には、魔法陣、詠唱、代償、契約などさまざまな術式——つまり準備が必要じゃ』

そこで一旦刀は間を置き、深刻そうな声で続ける。

『じゃが、その代わり威力は格段に上がるのじゃ。もはや、対抗するには魔法では無理じゃな』

絶望的だった。

魔法すら知らなかった琥珀に魔術式など使える筈も無い。

しかも、鎧の魔術式はもう完成間近だ。

「じゃあ、どうすればいいんだ？」

どんなに絶望的でも琥珀が怯えることは無い。

だからこそ、刀の行動に余裕を感じ、打開策があるのでは？と考えるほどの余裕があった。

刀は一瞬詰まらなそうに息をはいた。

琥珀の反応が面白くないようだ。

しかし、すぐに切り替えて、今度は得意げに息をはいた。

『フツ……避ければいいだけじゃろ。強いと言っても奴の魔術は何回も見ておる。属性は土。下から無数の岩の柱が突き出るやつじゃ。この祭壇の上ぐらいなら一瞬で針地獄じゃな』

最後にハッハッハ、と笑って見せた。
その乾いた笑いに琥珀の中に不安が過ぎる。

「なっ！？どうするんだよ！」

珍しく取り乱す琥珀。

そんな琥珀に刀はまた笑う。

しかし、今度は少し楽しそうだった。

『ハッハッハ。冗談じゃ。ようやくお主の人間っぽいところが見れたわい』

琥珀はそれをきき、少し安心すると共に軽い脱力感を覚えた。

「で、どうするんだ？」

冷静を取り戻した琥珀はジト目で刀を睨みながらいった。

『なんじゃ、もう終わりなのかえ？つまらんのか』

琥珀の額に青筋が生まれる。

敵に背を向け、刀を大きく振りかぶった。

『ま、待てっ。冗談じゃ！もうせん！投げんでくれっ』

刀が焦って声をあげる。

元々本気で投げるつもりはなかった琥珀も溜め息を吐きつつ構えを解いた。

戦いの最中だとは思えないほのぼのとしたやり取りだった。

「んで、結局どうすればいいんだ？」

琥珀が仕切り直す。

『簡単じゃ。下からくるなら上に逃げるんじゃ』

「上？どうやって？」

琥珀は上を見上げるが、相当高い天井があるだけで足場など見当たらぬ。

まず、琥珀のジャンプ力では天井に届くことさえ出来ないだろう。

『うむ。そろそろ鎧の準備も終わるころじゃしな。妾^{わらわ}を奴の真上の天井に投げてみよ。あ、包帯はもっておれよ？』

「なんでだ？」

『やればわかる。ちょっと急ぐのじゃ！』
鎧の方から空気が軋む音が聞こえる。

琥珀は半信半疑ながらも刀を全力で投げた。
刀は、そのまま一直線に天井に突き刺さる。
しかし、包帯は未だに琥珀の手の中だ。

「うわっ。包帯が伸びてる！？……おわっ！」

伸びていた包帯が急激に縮む。

琥珀は、それに引っ張りあげられた。

——ゴオオオオオン

鎧の魔術が発動する。

地面から無数の岩の柱が突き出て地面を隠す。

もはや、地面が見えるのは鎧の立っていた所と刀が刺さっていた所だけである。

「ふう。ひでえな。こりゃ」

天井近くまで引つ張りあげられた琥珀は刀に掴まりながら大きく息を吐く。

——ボコ…

天井から刀が抜ける。

もともと、ただ刺さっていただけの刀は琥珀の体重に耐え切れず抜け落ちたのだ。

しかし、これは刀の予想通り。

むしろ、今までもった方が奇跡的だ。

「なああああ!？」

鎧の真上にいた琥珀は鎧に向かって一直線に落ちる。

そこも、刀の思い通り。

琥珀が体勢を変えるだけで鎧は串刺しだ。

しかし、普通の人間にそんな咄嗟の判断は出来ない。

だが、刀は琥珀には出来ると確信めいた信頼があった。

刀は薄々感ずいていたのだ。

琥珀の欠けた感情に。

「くそっ!」

そして、琥珀は刀の信頼に答えるかのように切っ先を鎧に向ける。その瞳に恐怖はなく、ただただ、闘志に燃えていた。

深紅に煌く刃は、重力に導かれ、真っ直ぐ鎧に向かう。

それは、さながら紅い落雷のようだった。

——キン——

けたたましい金属音が響く。

刀は深く、深く鎧を貫いていた。

第五話 戦いノ意味（後書き）

次回予告

なんとか鎧に打ち勝った琥珀。

しかし、琥珀の第二の人生は始まったばかり。

次に琥珀を待つ運命とは！？

次回

「悪魔ノ意味」

第六話 悪魔ノ意味（前書き）

あらすじ

飛ばされた異世界でなんとか鎧に打ち勝った琥珀。しかし、琥珀の疑問は膨らむ一方だった。その疑問に答えるかのように刀が光りだす。

追記。

第五話の内容を変更。

第六話 悪魔ノ意味

「ふう……」

軽く息を吐きながら琥珀は鎧に突き刺さった刀を抜いた。

一見深々と刺さっているように見えるが、案外すんなり抜けた。

綺麗に刺さったからか、切れ味が凄いのか……。

『やれやれ……じゃな』

刀が疲れたように呟く。

その刀からはさつきまでの恐れは全くと言っていいほど感じなかった。

琥珀は鎧の近くに浅く突き刺した。

「だな。疲れた」

琥珀もどこか疲れた様子で返し、近くの突き出た巨大な針のような地面にもたれかかる。

鎧の魔術式は強力で琥珀がもたれた程度じゃびくともしない。

「なあ。聞きたいことがあるんだが」

琥珀は未だに紅く輝く刀に向かって聞いた。

『妾もじゃ。お互い、質問タイムといこうかの。そうじゃな……』

言い終わると同時に刀の輝きが一段と強くなる。

琥珀は思わず目を手で覆った。

「な、なんだ？」

徐々に光が収まっていく。

暫くして視界が回復した琥珀は目の前の光景に目を睜^{みは}った。

そこには、十三、四歳ほどの可愛らしい少女がいた。鋭い目をしているが刺々しい訳ではなく、不思議と落ち着く。艶やかな紅い髪は腰まで伸び、少し光っているようにも思えた。よく見ると頭の髪の隙間から小さな角？が見えていた。

手には鞘に納まった刀が握られている。

柄に巻いてあるボロボロの包帯と、染み付いた赤黒い血。まずさつきまで琥珀が使っていた刀に間違いないだろう。

「ふう。この姿も久々じゃのう。かれこれ百年ぐらいじゃろうか？」突然現れた少女は、刀と全く同じ声でしみじみと呟いた。

「誰だ？その刀と何か関係があるのか？」

琥珀は、刀を指差して聞いた。

「おっと、自己紹介がまだじゃったのう。妾の名はクレイ。この変な形の刃物に封印されていた悪魔じゃ」

クレイは刀を睨んでから口元を歪め、言った。

（悪魔……ねえ）

琥珀は少し考える。

悪魔と言えばいい印象はない。

だが、クレイが悪魔の言葉と共に見せたにやけた口元。

あの顔は何かを企んでいる顔だ。

なにより、クレイはイメージ通りの悪魔なら殺しを拒絶したことで辻褄が合わなかった。

「なんで封印されてたんだ？」

琥珀は、あえて悪魔のことには触れず、違う話題を振った。

「なんじゃ。悪魔と聞けば誰でも逃げ出すと言つのにのう。面白いのう」

クレイは詰まらなさそうに吐き捨てた。

その姿はどこか拗ねているようで琥珀には微笑ましく見えた。

「んで？誰に封印されたんだ？」

「悪魔にじゃ」

クレイはさらっと言い放った。

恨みがあると言つより興味が無いといった感じた。

「悪魔つて……仲間割れか？」

琥珀は思い浮かんだ可能性をそのまま口にした。

「微妙なところじゃな。ただ、少し力が強くて殺しが嫌いだっただけじゃ」

その声には少し諦めのようなものが含まれていた。

「どういうことだ？」

琥珀は、地面に腰を落とし聞いた。

「悪魔と言つのは殺しを好み、快感を感じる生き物じゃ」

クレイが語り始める。

琥珀は胡坐あぐらをかき、目を瞑り黙って聞いていた。

「じゃからのう。悪魔は生まれてすぐ人を殺させられるのじゃ。快感を覚えさせて病みつきにさせる為にの」

クレイが吐き捨てるように言った言葉に琥珀は少し驚いた。

たった今日の前にいる少女が人を殺しているとは思えなかったの

だ。

「ん？生まれてすぐだった？」

「悪魔は不老じゃ。つまり生まれてから死ぬまでこの姿。不満はないがの」

クレイは少し胸を張った。

しかし、残念ながらクレイの胸は控えめで微笑ましいことこの上なかった。

「こほん。勿論、妾も殺した。幼い子供じゃった」

クレイの顔に影がさす。

僅かな変化だが琥珀は見落とさなかった。

そして、黙って聞く。

まずは聞こうと思った。話はそれからいい。

「なのに全く嬉しくなかったのじゃ。悪魔失格じゃな」

クレイが下唇を噛む。

悔しさや悲しさ。

怒りや達観などといった感情を堪え、また口を開く。

「そして、そのことはすぐに他の悪魔も気づいた。不気味に感じた奴等は妾を殺そうとしたのじゃ」

異端者には死を。

当然のことだった。

しかし、琥珀は静かに怒っていた。

その感情を限界まで抑え、クレイの声に耳を傾けた。

「じゃが妾には力があつた。そこから逃げられる程の力が」
「じゃから封印されたのじゃ。」

そういつてクレイは口を閉じた。

琥珀は、静かに腰を上げた。

目の前にいる悪魔は俯き、悪魔らしくないただの女の子だった。

琥珀はクレイの頭を撫でた。

柔らかい肌触りの中からクレイの弱さが震えとなって伝わった。

琥珀は、割れ物を触るように優しく髪を梳いた。

「殺しは嫌か？」

クレイは微かに頷いた。

「悔しいか？」

またクレイは頷く。

「寂しいか？」

クレイは首を横に振った。

だが、今の琥珀には分かった。

これが強がりだということが。

「泣けよ」

琥珀の手の動きが止まる。

「え……？」

クレイが顔を上げる。

琥珀はその頬に手を当て真っ直ぐにクレイの目を見た。

「辛いときは泣け。すっきりするぞ」

琥珀は、優しい声で言って笑った。

「別に優しい悪魔がいてもいいじゃないか。俺は……お前を認めるよ」

クレイの瞳が揺れる。

——ガバツ！！

突然クレイが琥珀に飛びつく。

「おわっ！？」

琥珀は少し仰け反りながらもなんとか耐えた。

「うつ……うつ……」

クレイは琥珀の胸で泣いていた。

琥珀は、何か言おうとしたが諦め、その無防備な体を支え、頭を撫で続けた。

辺りにはクレイの泣き声だけが響いていた。

第六話 悪魔ノ意味（後書き）

次回予告

クレイの過去を聞き、信頼し合った琥珀。

一人で復讐しようとするクレイにとともに戦う決意を示した。

そして、この世界での戦闘で必要不可欠な魔法について教えを請うことに。

琥珀は無事魔法をマスターできるのか！？

次回

「魔法ノ意味」

第七話 魔法ノ意味（前書き）

あらすじ

以下略。

第七話 魔法ノ意味

「もういいのか？」

クレイが泣き出して暫く、クレイは落ち着き琥珀から離れた。

琥珀は、頃合をみて声を掛けた。

「うむ。見苦しいものを見せた。すまぬ」

クレイは、本当に申し訳なさそうに謝る。

その、少し腫れた目には疑いというものが全くない。

その実、クレイ自身も不思議でなかった。

何故、初対面の男に自分の過去を聞かせたのか？

何故、自分はこんなにも信用しているのか？

それほどまでに自分は追い詰められていたとでもいうのか。

だが、それだけではなかった。

琥珀の雰囲気。

それは、優しい悪魔には心地よいものだった。

「それぐらいで謝るな。それより、次は俺の番か？」

琥珀はクレイの律儀な態度に微笑み、聞いた。

しかし、未だにその手はクレイの頭を撫でており、クレイは嬉しいやら恥ずかしいやらでされるがままになったいた。

「どこから話そうか？やっぱり死んだところからだな」

琥珀は、前世のことを話そうか迷ったが、目の前の優しい悪魔を見てると隠し事など馬鹿馬鹿しく思えた。

クレイも撫でられているからなのか、興味があるのか、黙っていた。

琥珀は、今までのことを全てクレイに話した。
死ぬ前のこと。

神に会ったこと。

この世界に来たこと。

勿論、欠けた感情のことも。

「ふむ。そうじゃったのか」

クレイは、琥珀の説明が終わるとそれだけを呟いた。
そして、少し考えるような仕草をした。

「なんだ。意外とすんなり受け入れるんだな」

「いやなに。少し心当たりというかお主——琥珀、じゃったな？ま
あ、お主に違和感のようなものを感じていたのじゃ」

「違和感？」

「うむ。琥珀はあれじゃ」

「なんだ？」

「人間離れしすぎじゃの」

「ん？……そうなのか？」

琥珀としては確かに身体に異常を感じていたが、それがこの世界
でも異常だということに驚いた。

まあでも、そんなことを気にする琥珀ではないが。

「別に、全てがそうなのではない。魔力が多すぎるのじゃ」

「多いのか？」

琥珀には全く分からなかった。

まず、魔力という存在を今日初めて知った琥珀に分かる訳がなかった。

「うむ。無限といってもいいほどの」

「そうなのか。それって危険はないのか？」

「あるぞ？……まあ、きちんと魔力の制御を学べば問題ないがの」

「どこで学べるんだ？」

「妾が教えてもいいが、どれほど時間が掛かるか分からんのでな。

妾にはやるべきことがあるのでな。他をあたれ」

クレイは、自分で言っておいて少し後悔した。

琥珀と一緒にいたいと思ったのだ。

そして、そんな自分に一番困惑しているのも、クレイ自身だった。

「やるべきこと………復讐か？」

「そうじゃ……敵はでかい。早めに行動しておいた方がよい」

悪魔全て。確かにでかい。

クレイはそれでも一人で戦うつもりだった。

これは復讐。

無闇に他人を巻き込んではいけない。

「そうか。なら、俺も連れて行け」

駄目だ。

クレイにはその言葉を咄嗟に言うことが出来なかった。
それでも、クレイは決意を固める。

他人を、巻き込んではいけない！

「駄目だ」

「ふえ！？」

先に口を開いたのは琥珀だった。

クレイは言おうとしたことを先に言われ、変な声を上げ口をパク
パクさせることしか出来なかった。

「どうせ断るんだろ？ 受付ねえぞ」

「なぜじゃ？ 魔法なら他を当たればよろう」

クレイは、必死に平然を装いながら返した。

少しでも気を抜けば、すぐにでも飛びついてしまいかもしれない
ほどに、それはクレイにとって魅力的な話だった。

「あのな。俺は別に魔法を教えてほしいからお前と一緒に行く訳じ
ゃないぞ？」

琥珀の目が真剣なそれに変わる。

その目を見てクレイは、少し震えた。

「な、なら、何故なのじゃ？」

クレイは、もはや動揺を隠しきれていなかった。

次の言葉次第では自分が断り切れないことに無意識的に気づいた
のだ。

本来、今初めて会った男にこんなこと言われても即断だろう。
しかし、今回は琥珀の性格もあったかもしれないが、断ることが

出来なかった。

長い孤独は、クレイが思った以上に彼女を追いつめていた。

「俺はお前が気に入った。ただそれだけだ」

クレイは自分の中から何かが壊れる音が聞こえた気がした。ただ嬉しい。

クレイにとって生まれて初めて認められた存在だった。

「なあ。俺を仲間にしろよ。復讐……付き合ってやる」

琥珀は、まるで子供のように笑った。

クレイは、今にも琥珀に抱きついてしまいそうな身体を必死に抑えていた。

「す、好きにせい」

顔を真っ赤にして、そっぽを向きながら答えた。

そして、一度大げさに深呼吸した後、琥珀に向き直った。

「ならばまず、魔法を教えてやる」

クレイは、必死に真面目な顔を作り話題を逸らす。

まだ頬が赤いが、本人は無視する方向に固まったらしい。

「ん？そうか？よろしく頼むぞ」

「うむ。任せておけ。まず、魔法と魔術式の違いは戦いの中で説明したな。ならば、魔法についてももう少し掘り下げてみるかの」

そういつて、クレイは琥珀の正面に座る。

腰に挿してあった刀も横に置いた。

「ほれ、琥珀も座らんか」

「そうか？」

琥珀もその場に胡坐を掻いた。

少しゴツゴツしているが、気になる程度じゃない。
軽く足でこみ等を払ってから座った。

「魔法とは、誰もが身体の中に持っている魔力を使って発動するのじゃ。魔法は魔術式とは違って感覚で出来るものじゃ。その分威力は低いが、魔力消費が少ない上に同時発動も可能じゃからなにかと便利じゃな」

「感覚？どういうことだ？」

「ほれ」

——ボウ

クレイの手に小さな炎が灯る。

——ボオボボボボボウ

そして、次の瞬間にはクレイの周りに無数の火の玉が現れる。

「こんな感じじゃ。操ることも出来るぞ？まあ、この数では単純な動きしか出来んがの」

そういつてクレイは、琥珀と反対側にある鎧が出した岩の柱を見た。

無数の火の玉はその視線に合わせて、岩の柱に向かった。

——ドンー！ドンー！ドンー！ドンー！

全てが命中し、岩の柱は粉々に散った。

「なるほど。確かに呪文みたいなものは言っていないな」

「戦闘中、特に接近戦ではそんな暇ないしの。まあ、距離が近いとそこまで威力もいらんしの」

そこで、一旦話を区切り、続けた。

「まあ、魔法の特徴はこんなもんじゃな。次に属性についてじゃ」

「属性？火とか水とかか？」

「うむ。正確には、火、水、土、風、雷の基礎属性と無数の上級属性が存在する」

「無数の上級属性とはなんだ？」

「簡単に言えば、複数の属性を合わしたり、一つの属性を極めたりすると生まれる属性のことじゃ」

「そんなことが出来るのか？」

「例えば、火と土を合わせて爆属性。火を極めると炎属性といった感じにの」

「それなら確かに無数だな」

「そうじゃ。実際に琥珀の属性を調べてみんか？」

「分かるのか？」

「うむ。手を掲げて、魔力をそこに集中してみろ」

琥珀は言われたように手を掲げる。

しかし、そこで琥珀は固まった。

「どうしたのじゃ？はよせぬか」

「……魔力ってどうやって集中するんだ？」

「そうじゃった。そこから始めねばな」

「すまん」

「別に謝らずともよい。そうじゃな。身体の中に何か違和感のあるものはないか？」

「ん？どんな感じだ？」

「そこも感覚じゃ。本来ならば二週間は掛かる。焦らずともそのうち出来るじゃろ」

「そうか？」

しかし、琥珀は軽く返しただけでまた集中し始めた。

「別に琥珀には妾が居るのじゃ。そろそろ行かんか？」

——ボオ

琥珀の指先に二つ、炎が灯る。

中指に黄色の炎。小指に緑の炎だ。

若干、黄色の炎のほう大きい。

「な！？もう、できおった」

クレイが驚きの声を上げる。

「ふう。二色の炎？どういうことだ？」

「本当に人間離れしておるな。黄色は雷。緑は風じゃ」

「つまり、俺は雷と風の属性を持っている訳か」

「そうじゃ。にしても琥珀。お主運がいいのか悪いのか」

「何だ？」

琥珀は、魔力の炎を消した。

「属性の二つ持ちは珍しいんじゃ。それと、雷属性も珍しい。その両方なんて琥珀ぐらいなものじゃ」

クレイは呆れるように言った。

「そうなのか？」

「じゃがな。雷というのは特別なのじゃ」

「特別？」

「雷は他の属性と合わせて上級属性にすることが出来ないのじゃ」

雷は、上級属性が存在しない。

基礎属性の内、雷は孤高の存在だった。

「なるほど。確かに微妙なところだな」

「まあ、その分雷は強いがの」

「そうなのか。なあ、魔法はどう使った？」

「イメージするだけじゃ。まあ、それが難しいんじゃない」

「そうか。やってみる」

「別によいが暴走させてくれるなよ？力は抑えよ。でも、本来なら一ヶ月は掛かるのじゃ。期待はするなよ」

クレイは釘を刺しておいた。

無理だとは思うが、琥珀の魔力が暴走しては、この洞窟が崩れるかもしれない。かもしれない。

「こんな感じか？」

琥珀が、何も無い方向に向かって手を掲げる。

——ジジジ……ドゴオオオン！

琥珀の手から放たれる電光。

それは、多くの岩の柱を消し飛ばした。

その方向には、まるで道のように何もなくなっていた。

「どうだ？」

琥珀は、自分でも驚きながらもクレイをみた。

しかし、そのクレイは口をポカンと開け、呆然としていた。

そして、一度大きくため息を吐くと――

「もう何も言わんよ」

そういつて開けた道を歩き始めた。

「なんだ？もういくのか？」

琥珀もその跡に続いた。

「……はあ」

だが、クレイは何も答えず、また大きな溜め息を吐いた。

第七話 魔法ノ意味（後書き）

次回予告

なぜかすんなりと魔法が使えた琥珀。
だが、そんなことも気にせずに進み、二人は、洞窟のそとの森を歩いていた。

そこは、自然豊かな森で、

鳥の鳴き声や川のせせらぎ。

そして女性の悲鳴が響く場所だった！？

次回

「森の意味」

第八話 森の意味（前書き）

あらずじ

無事、洞窟の外に到達した琥珀たちの前には、広大な森が広がっていた。

しかし、その穏やかな雰囲気を嘲笑うかのように森から響く悲鳴。琥珀は走り出した。意味あるものを救うため。

第八話 森の意味

洞窟の外へ続く長い道。

その、入り組んだ迷路を二人は迷わず進んでいた。

「なあ、実際の話魔法ってどんな原理で出来ているんだ？」

クレイの目測で丁度半分程度まで進んだところで、今まで小さな風や雷を発生させずにやら考え込んでいた琥珀が先導するクレイに聞いた。

「さあの」

「さあのとて、知らないのに使っているのか？」

「仕方ないであろう？この世の中、原理を知らなくても使えるものは多い。いや、使えるようにしたもの、かの。それでも言うなれば当たり前の現象は楽に作れるし、辻褄が合わない現象は時間も掛かるし魔力も沢山使うの」

「どういう意味だ？」

「そうじゃな。例えば暖かい空気を作ろうとしよう」

クレイは、少し歩く速度を緩め、琥珀に並んだ。

「確かに魔法を使えば作れない訳ではない」

クレイが、手を琥珀の顔に向ける。

すると、琥珀の顔に暖かい風が当たった。

肌寒い洞窟の中ではそれはとても気持ちよかった。

「じゃが、現実世界そこにいきなり暖かい空気が発生することはない。その現実を曲げて魔法を使うから、おのずと発動も遅くなるのじゃ」

「そうなのか？じゃあ、どうすればいいんだ？」

「簡単じゃ。火を起こせばいい」

クレイの手に炎が灯る。

そして、さっきと同じ、いや、それ以上の温風が琥珀を暖めた。

「火は、そこに存在しているということを目で見て肌で感じる事が出来る。きっかけさえあれば簡単にここに存在できるものじゃ。だからこそ魔法で起こす変化も小さく、負担も減る。大袈裟な魔法ほど特にの」

「なるほど」

話を聞いたあと、再び琥珀は考え込んでしまった。

クレイはそんな琥珀を見て微笑んだあと、迷わないようにと一歩前に出た。

それから暫く歩くと、とうとう出口が見えてきた。

薄暗い洞窟に長く居た二人は、外の明るさに目を細めつつも、歩

調も軽く外へ向かった。

「空気がうまいな」

琥珀が地上に出た第一声がこれだ。

実際、周りは木に囲まれた森の中は空気も綺麗だろう。

「そろそろかの……琥珀」

「ん？どうし……おわ！」

突然、クレイが琥珀に何かを投げ渡した。

「持っておれ、妾が消えたらそれを抜くのじゃ」

クレイが琥珀に投げ渡したものは、クレイの腰にあった刀だった。

「なっ！？ちょ！待った！」

「なんじゃ？」

「どういうことだ？消えるって」

琥珀は不安で仕方ないという顔で聞いた。

いきなり異世界に放り出されて、また一人になると思うと当然の反応だ。

「別に居なくなるというわけではない。それじゃあ、頼んだぞい」

そついい残し、クレイは霧となって消えた。

琥珀も、半信半疑ながら刀を抜いた。

すると、銀色の刀にクレイが残した赤い霧が吸い込まれ見覚えのある紅色の刀に姿を変えた。

『ふう。なんとか戻れたの』

刀が声とともに僅かに震えた。

「クレイ……なのか？」

琥珀が刃の腹を撫でながら聞いた。

刀から聞こえた声は、紛れもなくクレイのものだったからだ。

『そうじゃ』

「なんで？」

琥珀の問いかけは、何故刀なのか？ではなく、何故また刀に戻っているのか？というものだった。

クレイもそれをしっかり理解したうえで答える。

『持ち主、いや、ここは主あるじと言った方がよいかの？まあそれが決まったといっても妾にかかった封印が解けたわけではないのじゃ。洞窟の中は特別に元の姿に戻るがさすがに外では無理じゃ』

「そうだったのか？だったら封印はどうすれば解けるんだ？」

『そうじゃの。琥珀のお蔭で枷はなくなった。あとは時間の問題じゃろて』

「そうか」

琥珀はクレイを鞘に収めた。

まあ、鞘をかけるベルトがないので手に持ったままだが。

——きやあああああああああああ！！！！！！

突如響く甲高い悲鳴。

琥珀は弾かれたかのようにその方角を見た。

その手は、一度離れたはずのクレイの柄をしっかりと握っていた。

「なんだ!？」

琥珀が叫ぶ。

声のした方向からは沢山の鳥たちが逃げてきていた。

『向こうに強い魔力反応じゃ!なんじゃこの膨大な魔力は!?...
琥珀!..!』

「どうした!」

焦りの為か二人とも声を荒げている。

『走れ!急ぐのじゃ!..!』

クレイの動詞のみの指示。

しかし、琥珀は言い終わる前にはもう走り出していた。

圧倒的な加速度で風を一気に追い抜く。

——パンツ!!

しかし、何かを破裂させたような音とともに琥珀は減速した。

急な加速により生じた空気抵抗のせいだ。

「いつてえ!」

身体の前、特に顔に走る痛みに琥珀は走りをとめた。

『何をしておる!いそがなかつ』

「っ!!!.....そうだった!」

クレイの渴で琥珀がまた前を向く。

——しかし、空気抵抗か……ん？空気？そうか——

琥珀は全身に薄く風を纏う。

これで、空気抵抗の心配はなくなった。

『琥珀、もう時間がない！こうなったら逃げるのじゃ！』
クレイから指示が飛ぶ。

しかし、琥珀は聞いてなかったフリをした。

琥珀にとって悲鳴を聞いておいて逃げるなんて選択肢はない。

——時間がない………試すか——

琥珀は、さつき思い浮かんだ魔法を使ってみることにした。
いきなり本番だが状況が状況だ。

といっても、琥珀はあまり状況を理解していないが。

琥珀の足が地面を撫でる。

刀は腰に添えられ右手でしっかり握れている。

『なにをするきじゃ！逃げよ！』

クレイが叫ぶ。

しかし、琥珀には届いていなかった。

琥珀の引いている左足が強い放電を起こす。

しかし、その放電は琥珀の目的の副産物に過ぎない。

徐々に琥珀の足と地面の間に磁場が生成される。

所謂電気磁石だ。

しかし、まだ魔法を使いこなせない琥珀では制御できない電気が空気中に放出されてしまっている。

これではうまく電圧が上がらない。

——逃げるなら逃げ先を誘導するまで！——

琥珀から放出されていた電気が再度琥珀に戻る。

琥珀の身体から足、地面、空気中、そしてまた琥珀に戻るという循環。

そこには、はっきりとした電子回路が出来ていた。

しかし、琥珀はまだ魔法を発動していない。

魔法という抵抗のない回路は電流が際限なく増え続け限りなく∞に近づく。

そして、それが制御できる範囲を超えショートする寸前。

琥珀は魔法を発動した。

その場から琥珀の姿が掻き消える。

琥珀は音速を超えた速さで移動していた。

——はやっ！？これはそんなに使えないな——

琥珀はその速さに驚きながらも前を見据える。

風によって守られている琥珀はなんの抵抗も受けることなく進んでいく。

立ちはだかる木々は雷の余派で燃え消え、そこに酸化した黒い爪痕を残していった。

『琥珀！何をしたかはわからんがでかしたぞ！そのまま突き進め！』

クレイが叫ぶ。

琥珀は返事の代わりに口元を少し釣り上げた。

暫く——実際は1秒もたっていないが——すると、少し開けた場所に出て何か見えてきた。

「なんだあれ？」

そのさきにあったのは、三つの人影と大きな禍々しい漆黒の塊だった。

塊は1人の人影が支えており、あとの二つと対峙するように構えていた。

『詳しいことはあとじゃ！とにかくあの危なかったものを出して
る奴を蹴飛ばさんかつ！！』

「りょーかい！」

琥珀は空中で体を振り、足に力を入れる。

すると、無意識的に足から風と雷が生まれた。

その相容れない二つの魔法は衝突し合い、小さな火花をバチバチと散らした。

——おりやつ——

音おも超える速度、強化された全身の力、そして魔法。
その全てが会心の蹴りとなり目標に直撃した。

——ドゴン——

相手は人体からは決して出してはいけない音を出し、吹き飛んだ。

琥珀は難なく地面に着地、漆黒の塊は空気に溶け込むように四散した。

『ふう。なんとか間に合ったわい』

クレイからため息が漏れる。

琥珀はその声に心の中で謝りつつも後ろに振り向いた。

そこには、二人の人がいた。

二人とも黒いローブで全身を隠し、顔も深く被ったフードで隠していた。

「あ、あの――

――ドゴオオオオン！！！！

フードの一人が何か言おうとした瞬間、琥珀の前方、つまり相手が吹き飛んだ方向から爆発音が聞こえた。

琥珀がそつちを向くと、大量の瓦礫が琥珀目掛けて飛んできていた。

琥珀は身を守るためにゆっくりと手のひらを前に掲げた。

第八話 森の意味（後書き）

次回予告

なんとかクレイの恐れていた自体を回避できた琥珀。
しかし、新たな敵からの攻撃を受ける。
敵は実力のわからない謎の相手。
その怪しげな力が琥珀を襲う。

次回

「狂いの意味」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7153t/>

存在ノ意味

2011年10月10日20時02分発行